

ドイツの音楽教育における多文化共生に向けた取組みーハンブルク州 Jedem Kind ein Instrument  
プロジェクトの事例からー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤山, あやか メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32125/00000056">https://doi.org/10.32125/00000056</a>

**ドイツの音楽教育における多文化共生に向けた取り組み**  
**— ハンブルク州 Jedem Kind ein Instrument プロジェクトの事例から —**  
**Approaches to Music Education in Germany for multicultural coexistence support**  
**Overview of the “ JeKi ” Project in Hamburg**

藤山あやか  
Ayaka TOYAMA

抄録:

ドイツ連邦共和国・ハンブルク州の基礎学校“Grundschule”に導入されている器楽教育プロジェクト“Jedem Kind ein Instrument（どの子どもたちにも一つの楽器を）”（以下、JeKi）について、その教育理念や概要を述べる。同国は戦後の高度復興期より移民社会の背景を持っており、とりわけ近年は東欧諸国や中近東からの移民が増大し社会問題となっている。このような背景により、音楽を通して多様化する価値観を共有し共存社会の形成の実現を目指すことを目的として JeKi が導入された。

現地調査（2019年3月、同年9月）では、①ハンブルク州における JeKi の運用、②基礎学校3・4年生対象の授業見学、③ハンブルク教育省 JeKi 部門主任ガブリエラ・フスラーゲ氏および講師インタビューを行うことができた。当該プロジェクトの効果検証について、ドイツ連邦教育研究省よりストレス対応力と自己肯定感の向上が明らかにされており、特に教育環境に恵まれない、あるいは経済的に困難な家庭の子どもたちにおいて効果が高いことが示されている。これらの実態分析により、学校教育の枠組みで実施されている JeKi の取り組みから、多文化共生教育の実現を念頭に置いて展開されているカリキュラムや実際の授業展開および指導法の特質を見出し、わが国における器楽教育への適用の方向性について示唆を得る。

Abstract:

This Study reports and discusses about “*Jeki*” - a project of introducing instrumental music to Grundschule of Hamburg in Germany. From the beginning of the 21st century on, Germany have been receiving massive immigrants from Middle East and other European countries. The German federal government introduced *Jeki* with the purpose of permeating multiculturalism through music. My field work was examined on March of 2019. The structure of the report consists of three sections below:

1. A history and system of *Jeki* project
2. Classroom observations of third and fourth graders in The Grundschule Hamburg
3. The interview with Mrs. Gabriela Huslage who is the chief manager and the teachers in the *Jeki* - Grundschulen on concepts and curriculum.

キーワード：初等音楽教育、器楽学習、多文化共生

Keyword: elementary music education, instrumental activities, multicultural coexistence

## 1. はじめに

ドイツ連邦共和国は戦後の高度復興期より移民社会の背景を持っており、2011年以降、東欧および南欧諸国や中近東からの移民が増大し社会問題となっている<sup>1</sup>。このような背景の中で、音楽を通して多様化する価値観を共有し共存社会の形成の実現を目指すことを目的とした器楽教育プロジェクト“Jedem Kind ein Instrument（どの子どもたちにも一つの楽器を）”

が導入された。JeKi は、南米ベネズエラで実施された音楽教育プログラム「エル・システマ “El Sistema”」の理念に基づいている<sup>2</sup>。エル・システマは、誰もが平等に無償で音楽教育を受けることができるシステムであり、貧困格差により薬物や犯罪に着手する子どもたちに楽器を演奏させることで目標を持たせ、練習の成果から達成感を体験させるなど音楽を通じた社会教育を国家プロジェクトとして実施されている。

一方、ドイツにおいてもミュージクシューレ “Musikschule” が設けられるなど、廉価なレッスン代や楽器借用費で音楽を学ぶことのできる環境は充実している。しかし、経済的に困難で教育環境に恵まれない家庭の子どもたちにとって、このような課外音楽活動を経験する機会は少ない。そこで、家庭の経済状況にも関わらず、すべての子どもが無償で器楽学習を受けられることのできる教育環境を構築するため、学校教育の枠組みで JeKi を導入した。移民の子どもたちが言語を習得する困難さ、あるいは文化や慣習の違いから社会的孤立を感じるということが問題視されているなかで、器楽学習は必ずしも言語による表現活動に重点を置いておらず、子どもたちのコミュニティをとる手段として重要な役割を担っていると言える。

本稿で取り上げるハンブルク州は、2011 年にはドイツ国内において州の総人口に占める移民の背景を持つ人の割合が最も高く、年々増加を続けている。現在、その割合は州人口の約 35%を占めており、基礎学校に通う子どもたちは約 50%が移民の背景を持っている<sup>3</sup>。さらに同州では、JeKi の運用に年間約 170 万ユーロの予算を計上するなど、当該プロジェクトに対して多額の資金を投じている。一方で、このようなプロジェクトを遂行するためには十分な予算が必要であり、とりわけ人口規模が大きく、予算を十分に確保することが難しい地域ではすべての学校で楽器を購入することが困難である。他州では JeKi に類似したプログラムが展開されており、“Jedem Kind Instrumente, Tanzen, Singen (どの子どもたちにも楽器、ダンス、歌を)” や、“Jedem Kind seine Stimme (すべての子どもが自分の声で)” など、楽器のみならず歌やダンスを取り入れるプロジェクトなどが実施されている。ハンブルク州においては比較的財政状況が良好であり、潤沢な教育予算が確保されているため器楽教育に特化した JeKi プロジェクトが続けられている。このような点から、ハンブルク州における JeKi について現地調査 (2019 年 3 月, 同年 9 月) に基づき、当該プロジェクトの教育理念や運用方法を概観すると同時に、これらの実態分析により教育効果を明らかにする。そして、JeKi のカリキュラムや実際の授業展開および指導法の特質を見出すことを目的とする。

## 2. ハンブルク州における JeKi プロジェクト

### 2.1 プロジェクトの概要と運用方法

JeKi は、基礎学校 “Grundschule” 2 年生以上の子ども一人に一つの楽器を与え<sup>4</sup>、その演奏技能を学校教育の枠組みの中で習得させる器楽学習である。ハンブルク州では、「子どもたちが楽器を通じて言葉などの壁を越えて相互理解し、共存社会の形成の実現を目指すこと」<sup>5</sup> を教育理念として 2009/2010 年度に導入され、ハンブルク教育省 JeKi 部門の管轄により市内 62 校の基礎学校で実施されており<sup>6</sup>、市当局と各学校の JeKi コーディネーター、外部講師の三者連携のもと、運営代表者が中心となった定期的な協議会や、講師向けの講習会等を開催して運用されている。

2009/2010 年度に市当局が運用する JeKi が開始される前、市当局と学校、音楽大学 “Musikhochschule” で、音楽学校が中心となり 3 つの基礎学校でテストプロジェクトが行われた。その後、市長やスポンサーの理解を得て、市当局より選定された 62 校で JeKi の運用が開始された。選定校は、導入時に市内で公募を募って決定し、特に経済的問題や文化的問題を抱える地域を重点的に配慮して各所に偏りなく分布されている。当該プロジェクトは、年間約 170 万ユーロを投じて楽器の購入や講師の謝金に充てられており、こうした資金運用により子どもたちは無償で楽器を借用したり、レッスンを受けることが可能となっている。また、授業を行う講師は、現在 175 名おり内 70 名は市の正規職員として雇用し、その他は音楽学校に所属している講師やフリーランスの音楽家が外部講師として採用されている。講師の謝金は、1 コマ (45 分) あたり約 39 ユーロで、1 年目は試用期間があるものの経験を積むにつれ昇給することもある。これらの謝金は、原則として市からそれぞれの講師が所属する機関 (例えば、音楽学校など) に支払われ、そのうち 5 ユーロは機関の管理費などに

充てられている。

これまでに、約3万人の子どもたちが JeKi に参加し、卒業後もギムナージウム “Gymnasium” 等に進学し楽器の演奏を続けている子どもや、プライベートレッスンを受けて様々なコンクールで賞を受賞する者も現れている。さらに、年度末に各学校が主催となって行う発表会が企画され、年に一度、ライスハレ Laeiszhalle にてハンブルク州全体の成果発表会が開催されている<sup>7</sup>。

## 2. 2 JeKi のカリキュラム

ドイツでは全16州において、教育カリキュラムを含めた教育政策の決定権は各州に委ねられているため、その教育制度や学校体系は州によって異なる。ハンブルク州では、「基礎学校音楽科目カリキュラム “Bildungsplan Grundschule Musik”」の中で音楽科教育の指針が示されており、JeKi に関しては「JeKi 授業の手引き “Unterrichtsleitfaden JeKi”」で、当該プロジェクトの教育目的および教授法や実践例が示されている。

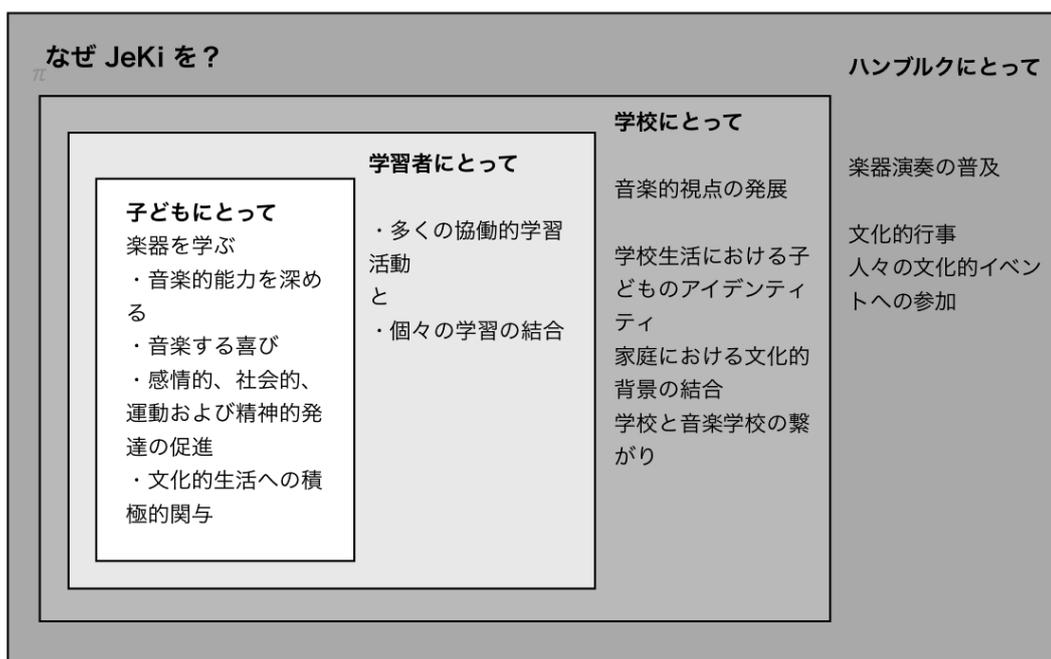


図1: JeKi のレッスンの手引きによる構想図

(Unterrichtsleitfaden JeKi, Hamburg 2019)

いずれの基礎学校においても2年生から JeKi が始まり、週2コマの授業のうち専任教員による通常授業と JeKi の授業が1コマずつ設定されている。まず、2年生では「楽器を知る」ことをテーマとし、1年間で様々な楽器を体験する「メリーゴーランド型」 (“Karussell Unterricht”) のグループレッスンを行っている。子どもや学校の状況によるが、楽器の体験レッスンは、各楽器10名程度のグループレッスンが複数の教員により同時進行で行われ、2年生の間で概ね5~6つの楽器が体験できるようになっている。その後、学期末には希望する楽器を第3希望まで調査し、教員が演奏楽器を決定する。そして、3・4年では「楽器のレッスン」を中心に、原則として2年間続けて同じ楽器を演奏し技術を習得する。基本的には、6~9人のグループレッスンで授業を進め、そのほか各楽器の合同グループで演奏するアンサンブルやオーケストラの授業などもあり、学年末の成果発表会に向けた練習も行っている。使用する楽器は、各学校の JeKi コーディネーターが弦楽器、木管楽器、撥弦楽器、鍵盤楽器、金管楽器、打楽器から選定された22の楽器から選択することができる。採用する楽器、あるいは実際のレッスン内容などは、それぞれの学校および担当講師の裁量に任されている。

## 2. 3 JeKi の授業評価

前述の通り、当該プロジェクトは音楽科教育の一環として実施されているため、成績評価を行うための評価基準が明示されている。各レッスン担当講師は、示された項目に沿って子どもたちの授業態度を評価するが、外部講師はあくまでも評点の提案を行うのみで、日頃の取組み等を鑑み専任講師が最終評定を決定する。

表 1: JeKi レッソンの評価シート

名前:	名字:					クラス:	楽器:
	++	+	o	-	--	講師からのコメント	
楽器の上達							
合奏							
評点の提案							
その他							

(Bewertungsliste JeKi-Unterricht, Hamburg 2018)

## 3. JeKi プロジェクトの実際

### 3. 1 調査研究の概要

2019 年 9 月 3 日から同月 9 日まで、JeKi を導入しているハンブルク市内の 4 つの基礎学校を訪問し 3・4 年生対象の授業を全 9 コマ参観した。授業終了後は、専任講師および JeKi コーディネーター、外部講師へのインタビュー調査を行った。また、ハンブルク教育省 JeKi 部門主任ガブリエラ・フスラーグ Gabriela Huslage 氏との面談の機会を得ることができ、当該プロジェクトの教育理念について詳細にインタビューを行うことができた。以下、調査研究の行程とその概略を示す。

表 2: 調査研究の行程表および授業参観の概要

日程	訪問先	時間	対象	楽器	選択可能な楽器のレッスン
9/3 (火)	カール・コーン 基礎学校 Carl-Cohn-Schule	10:00 - 10:45	3 年生	ジャンベ	ギター、ヴァイオリン、チェロ、フルート、ホルネット、 クラリネット、打楽器
		10:50 - 11:35	4 年生	ギター	
		授業参観終了後、専任教員 (JeKi コーディネーター) 1 名および外部講師 1 名との懇談			
9/4 (水)	ターデン・シュトラ ーセ基礎学校 Grundschule Thadenstraße	08:00 - 08:45	4 年生	ジャンベ	ギター、ヴァイオリン、チェロ、キーボード、フルート、 打楽器
		08:50 - 09:35	4 年生	ヴァイオリ ン	
		09:40 - 10:25	3 年生	キーボード	
		授業参観終了後、校長との面会、専任教員 (JeKi コーディネーター) 1 名および外部講師 3 名との懇談			
9/5 (木)	トラーパーヴェーク 基礎学校 Schule Traberweg	10:00 - 10:45	4 年生	チェロ	ギター、ヴァイオリン、キーボード、チェロ
		10:50 - 11:35	4 年生	ギター	
		授業参観終了後、JeKi コーディネーター 1 名および外部講師 5 名との懇談			
9/9 (月)	アルンキール・シュ トラーセ基礎学校	10:35 - 11:20	4 年生	ギター	ギター、フルート、ホルネット、アコーディオン、打楽器
		11:40 - 12:25	4 年生	ホルネット	

Grundschule Arnkielstraße	授業参観終了後、JeKi コーディネーター 1 名および外部講師 6 名との懇談
ハンブルク教育省 Hamburg Behörde für Schule und Berufsbildung	ハンブルク教育省 JeKi 部門主任ガブリエラ・フスラーゲ氏との懇談

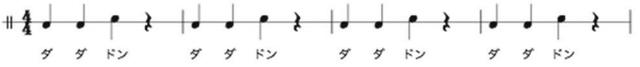
### 3. 2 JeKi の授業実践

今回、視察を行なった授業は、いずれも年度始めの第3回目の授業であった。3年生は、楽器の振り分けが終わったばかりの段階で、楽器の取り扱い方や基礎的な奏法を中心に、楽器を用いたゲームを取り入れるなど初歩的な内容であった。前述の通り、レッスン内容や教材選択はそれぞれの担当講師の裁量に任されているため、同じ楽器を使用していてもその教授法は多様である。これらの授業視察より、以下に各学校で行われている授業の事例をあげ授業展開および指導法の特徴を見出す。

#### (1) 3年生のジャンベの授業（カール・コーン基礎学校）

ジャンベの授業は8名のクラスで行われており、授業の導入部では歌をうたうことから始まった。本時は3つの活動で構成され、ジャンベ、カホンのほかにタンバリンなどの小物打楽器を用いた活動が行われた。いずれの活動においても、まずは楽器の音に注目させ、叩き方により異なる音色や響きの違いなどその特徴を感じ取らせることを重要視していた。また、教師が提示したリズムや、子どもたち同士でつくったリズムを真似する際、拍子や速度、強弱に着目させ他者と「合わせる」ことを認識させていた。リズム打ちは4分の4拍子を基本として行っており、多くの子どもが一定の規則的なリズムを提示するなかで、一部の子どもは弱拍にアクセントを置くいわゆるラテン系のリズムを演奏するなど、多様なリズムが提案され非常に興味深い内容であった。

	学習活動と内容	指導上の留意点
導入 (5分)	・全員で歌をうたう。	・授業開始時に、始まりの歌をうたう。
1 (10分)	<p>【配置図】</p>  <p>● : 教師 ○ : 子ども</p> <p>・カホンを用意し、輪になって座る。 ・先生のマネをして、全員で簡単なリズムを叩く。 ・一人ずつ4分の4拍子に合わせて即興でリズムをつくり、全員がマネをする。</p>	<p>・「Orchester Regel（オーケストラのルール）」と板書し、授業でのルール決め（私語をしないなど）をする。</p> <p>・バス（低音）とハイ（高音）を意識させ、音の違いを感じさせる。 ・ラテン系のCDに合わせてリズムをたたく。</p>
2 (13分)	<p>・ジャンベを用意し、輪になって座る。 ・右手のみで、低音と中音を叩き分け音の違いを確認する。 ・以下のリズムを口ずさみながら、身体を使ったリズム遊びをする。</p>	<p>・ジャンベを傾かせて、音の響きを確認させる。 ・足踏みをさせ、4拍子のリズムを定着させる。</p>

	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ダ」「ダ」「ドン」の、「ドン」のところで、ポーズを決めたり、隣の人に触れたり、強弱や速度を変更して遊ぶ。</li> <li>・ジャンベの上に座り「ドン」のところを低音で叩く。</li> <li>・一人ずつ順番に叩いていく。</li> </ul>	
<p>3 (7分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・打楽器を一人に1つ渡す。</li> <li>・それぞれが楽器をならして、音の特徴を聞く。</li> <li>・「港を目指そう」という音遊びゲームをする。</li> </ul> <ol style="list-style-type: none"> <li>①まず、「港」の音を決める。</li> <li>②「船」役になった子どもは目隠しをする。</li> <li>③「岩礁」役になった子どもは、「船」が近づいてきたら、音を鳴らして「岩礁」があることを伝える。</li> <li>④「船」は、音を聞き分けながら「港」を目指す。</li> </ol> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タンバリン、ギロ、クラベス、カバサ、カシシ、トライアングルを渡す。</li> <li>・「岩礁」の子どもたちに、「船」が近づいてきたら大きな音で楽器を鳴らすように伝える。</li> </ul>

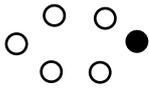
ターデン・シュトラーク基礎学校でも、同楽器の授業見学を行なった。ここでは、ジャンベのほかに西アフリカの伝統楽器ドゥンドン・サンバン・ケンケニを2セット用いて、ジャンベとのアンサンブルを中心に活動が展開された。また、前に出て太鼓を叩く子や、小物打楽器カシシを鳴らす子を交代させながら、全員の子どもが積極的に関与できるよう配慮があった。さらに、4小節のリズムパターンをモチーフに、音や速度の組み合わせによって変化する曲想を感じ取らせることに着目させていた。

## (2) 4年生のチェロの授業（トラーパーヴェーク基礎学校）

当学校では2009 / 2010年度、ハンブルク州の JeKi 開始時と同時に導入された。現在では、ハンブルク州全体の JeKi 定期演奏会に加えて学校主催のアンサンブル発表会を実施するなど、積極的な演奏発表活動を行なっている。

今回見学したチェロの授業では5名の子どもが受講しており、楽器は子どもの身長に応じて1/4サイズのものを使用していた。当授業では、子どもたちに①チェロを選んだ理由、②家での練習時間について質問ができた。①について、「家にはピアノがあり、ギターは多くの子がするので新しいものに挑戦したかった」、「2年生の体験レッスンでチェロを弾いたら音色がきれいだった」、「低音楽器が演奏したかった」などが挙げられた。また、②については、大半の子どもが毎日20分程度練習しているが、一方で、「音が大きくなかなか家では練習できない」との声があがった。以下、授業内容について示す。

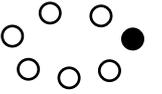
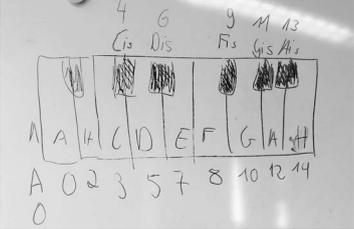
	学習活動と内容	指導上の留意点
<p>導入 (5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・調弦を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全員の調弦を行い、楽器の置き方や弓の持ち方などを確認し、楽器を丁寧に扱うことの大切さを伝える。</li> </ul>

<p>1 (5分)</p>	<p>【配置図】</p>  <p>● : 教師 ○ : 子ども</p> <p>・弓の持ち方や指位置を確認し、棹（スティック）の部分を上から下に向かってスライドさせる。</p>	<p>・目を閉じさせて弓を持たせ、全ての指や関節が柔軟になるようにウォーミングアップをさせる。</p>
<p>2 (10分)</p>	<p>・全員で基礎練習を行う。</p> 	<p>・力を入れず、常に柔軟な姿勢を保つようにさせる。</p> <p>・目を閉じて演奏させる。</p>
<p>3 (10分)</p>	<p>・全員で曲を練習する。</p>  <p>・2人組で演奏する。</p>	<p>・教員が作曲したものを演奏させる。</p> <p>・演奏を聴いている時の楽器の持ち方や置き方を決めて伝える。</p>
<p>4 (5分)</p>	<p>・次回の課題曲「He ho, spann den Wagen an」を歌う。</p> 	<p>・最初の音をチェロで確認し、チェロで旋律を演奏する。</p>

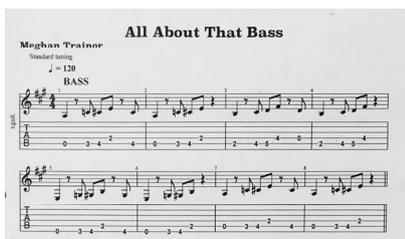
(3) 4年生のギター授業（アルンキール・シュトラッセ基礎学校）

当授業では、五線譜とタブラチュア譜の両方を用いていること、ピアノの鍵盤を用いてコード名や音名を確認していることなど、理論と実践を関連付けていることが印象的であった。楽器の演奏技術向上のみならず、音楽科の授業と関連づけることを念頭に置き授業を展開していた。

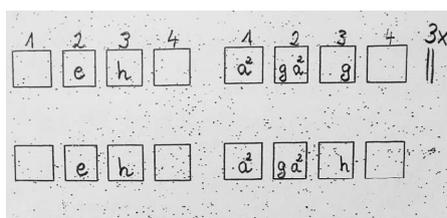
	学習活動と内容	指導上の留意点
<p>導入 (8分)</p>	<p>・チューニングを行う。</p> <p>・宿題の確認を行う。</p>	<p>・各自でほしい調弦させておき、講師がチューナーを使用して正しい音程か確認する。</p> <p>・子どもの「練習時間チェック表」を確認する。</p>

<p>1 (12分)</p>	<p>【配置図】</p>  <p>● : 教師 ○ : 子ども</p> <p>・ 楽譜（写真：一番左）を用いて、全員で旋律を演奏する。 ・ 1人ずつ交代で演奏する。</p>	<p>・ 子どもたちが演奏する旋律に合わせてギターで伴奏する。</p>
<p>2 (15分)</p>	<p>・ 音名について学習する。 ・ 板書されたピアノ鍵盤を確認しながら、音名（#を含む）の位置を確認する。</p> 	<p>・ 音名はなぜ、A, B, C.. の順番でないかを考えさせる。 ・ ピアノ鍵盤を用いて音名、音の位置、ギターの指番号を関連づけて覚えさせる。</p>
<p>3 (10分)</p>	<p>・ ギターでは、同音異ポジションがあり、同じ音が出るポジションがあることを知る。 ・ 1人ずつ音を確認する。</p>	<p>・ 次回の宿題を提示する。</p>

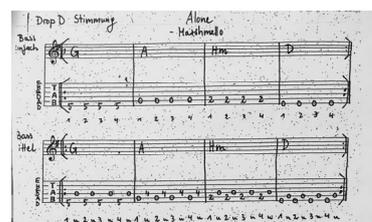
また、他校で見学したギターの授業では、楽譜は用いているものの旋律が記載されているものはなかった。同じ楽器の授業でも、受講生の音楽的能力などを鑑みて活動を展開し、また教員の経験や考えに応じて指導法は全く異なることが分かった。



五線譜とタブラチュア譜を用いている楽譜  
(アルンキール・シュトラッセ基礎学校)



コードのみを記載している楽譜  
(トラーパーヴェーク基礎学校)



コードとタブラチュア譜を用いている楽譜  
(カール・コーン基礎学校)

写真1：各学校で使用されていたギターの楽譜

#### 4. 考察とまとめ

参観した9つの授業を概観し、まず、授業カリキュラムについて、週2コマ設定されている音楽科の授業のうち1コマの通常の授業では専任講師が歌唱や鑑賞、音楽理論の学習を行っており、一部の基礎学校では、JeKiの指定教科書を用いて歌唱や創作活動およびリズム学習に重点を置いた授業行なっていることが分かった。一方、指定教科書を用いていない専任講師も、これまでリコーダーを中心に行っていた器楽学習が、JeKiで充実した器楽学習を行うことで通常の授業とのバランスを保つことができ、子どもたちの音楽活動に対するモチベーションが高まり、授業に対する集中力があがったなどその効果を実感している。

次に使用楽器について、いずれの学校にも共通して用意されていたのがヴァイオリン、ギター、打楽器である。特にヴァイオリンとギターは、演奏しやすい（音が出る）、持ち運びができることから子どもたちからの希望が多く、学校に2～3つのクラスが設けられているケースが多く見受けられた。また、楽器は学校から貸与され、使用期間は子どもたちが各自管理しているため学外での自主練習も可能である。ピアノのように持ち運びが困難な楽器は、学校内で使用するものとは別に自宅での練習のために無償で貸し出しをしているケースもある<sup>8</sup>。レッスンについて、JeKiは6～9人の少人数で行うため、子どもたちの個々の進度に応じて授業を進めることが可能である。さらに、楽器を演奏する中で、音楽に関する知識や理解を深めることができるため、結果的に通常の音楽授業での学習効果を高めることが期待できる。前述の通り、JeKiのカリキュラムに基づいた教科書および指導書はあるものの、講師の大半が独自のテキストを使用して授業を行っている。同じ楽器のレッスンを並行して行う場合、教員同士が相談して共通した教材を使用することはあるが、そのレッスン内容は各教員の裁量に任されている。一方、いずれの授業においても、45分間の授業内で楽器の演奏技術の向上のみにとどまらず、一つの題材を歌唱活動や創作活動、ソルフェージュやアンサンブルなど多角的にアプローチする複合的な学習を行っていることが明らかとなった。

JeKiの効果検証について、ドイツ連邦教育研究省が効果検証のために年間100万ユーロを投じ、2009～2015年の間に17の大学と連携した研究プロジェクトが行われた。これらの成果について、「JeKiについての実証的教育研究報告“Empirische Bildungsforschung zu Jedem Kind ein Instrument”」より、精神的・身体的なストレスマネジメントおよび問題解決能力、自己肯定感の向上が明らかにされている。実際、経済的問題や精神的問題を抱える子どもが多く存在する地域の学校を訪問した際、精神的問題を抱え不登校傾向にある子どもが、JeKiの授業のなかでアンサンブルの合図を出したり、前に出て発表するなど、音楽活動を通じて他者と交流し関係性を築いている姿が見受けられた。専任講師および授業担当者のインタビュー調査からも、これらの音楽活動が自己肯定感を高める一助となっていると言えよう。

今回の現地調査では、授業視察および当該プロジェクトに携わる教員のインタビュー調査により、各基礎学校で実施しているJeKiの実際や、教授法の特徴等について知見を得ることができた。また、JeKiは多文化共生教育の視点のみならず、市当局と学校教育現場、そして音楽学校の講師など地域社会が連携した組織的な仕組みとして理想的な連携体制のあり方を示している。このような特色ある音楽教育の取組みは、学修成果発表会を通じて学外に発信することで子どもたちが家族や地域と繋がるきっかけとなり、さらには、地域における芸術文化振興の一翼を担っていると言えよう。これらの取組みを概観し、「多文化共生」の実現に向けて地方自治体と教育現場、地域社会が有機的な繋がりを持つ教育活動を展開していくにあたり、音楽教育は重要な位置づけにあると考える。引き続き、JeKiの効果検証と授業および指導内容の関連性について調査を進め、JeKiの理念を参考にしたわが国における器楽教育への示唆を得たい。

## 付記

本研究は、JSPS科研費JP19K14223「多文化共生社会の実現に向けた器楽教育に関する日独比較研究」の助成により実施し、第35回全国大学音楽教育学会全国大会（札幌大会）、全国大学音楽教育学会中・四国地区学会令和元年度研究会の研究発表に基づき再構成したものである。

## 注

<sup>1</sup> 2011年5月、労働市場が完全開放されたことによる労働者の移動により、2018年にはドイツの総人口約8160万人のうち、移民の背景を持つ人は2080万人（25.5%）となった。

<sup>2</sup> ベネズエラ出身の音楽家ホセ・アントニオ・アブレウ博士 José Antonio Abreu Anselmi（1939-2018）によって、1975年

「音楽の社会運動」として創立された。

<sup>3</sup> 2018年8月23日現在、ハンブルクおよびシュレースヴィヒホルシュタイン州の統計調査による。

<sup>4</sup> レッスンは、3年生から開始する。

<sup>5</sup> ハンブルク教育省 JeKi 部門主任ガブリエラ・フスラーゲ氏のインタビュー調査 (2019.9.9) による。

<sup>6</sup> 市内 206 校の基礎学校のうち 70 校に導入されており、内 8 校は音楽大学が運用している。

<sup>7</sup> ライスハレは、ドイツのハンブルクにあるコンサートホールで、現在、ハンブルク交響楽団の本拠地となっている。来年度は、JeKi の導入から 10 年の節目を迎え、2020 年 5 月、同会場で 10 周年記念コンサートの開催が予定されている。

<sup>8</sup> トラーバーヴェーク基礎学校 JeKi コーディネーターのインタビュー調査 (2019.9.5) による。

## 参考文献

- [1] 伊藤真 (2017) 「ドイツの小学校における器楽学習の特徴と意義 -ハンブルク州の JeKi プロジェクトの事例から-」 『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座紀要第 29 巻』 pp. 13-22
- [2] 尾見敦子, 井下べに (2018) 「ドイツにおける学校音楽の推進プログラム -ノイス市の “Jedem Kind seine Stimme” プロジェクトの事例から-」 『川村学園女子大学研究紀要第 29 巻第 2 号』 pp. 137-160
- [3] 藤山あやか (2018) 「ドイツにおける初等音楽教育の実際～ JeKi プロジェクトの事例を中心に～」 『全国大学音楽教育学会中・四国地区学会研究会』 pp. 6-7
- [4] Koordinierungsstelle des BMBF-Forschungsschwerpunkts zu Jedem Kind ein Instrument (2013) 『Empirische Bildungsforschung zu Jedem Kind ein Instrument』 Bielefeld
- [5] Bundeszentrale für politische Bildung 「Soziale Situation in Deutschland」 <https://www.bpb.de/nachschlagen/zahlen-und-fakten/soziale-situation-in-deutschland/> (2020 年 1 月 10 日最終閲覧)
- [6] Statistisches Amt für Hamburg und Schleswig-Holstein 「Bevölkerung mit Migrationshintergrund in den Hamburger Stadtteilen Ende 2017」 (2020 年 1 月 10 日最終閲覧)

藤山あやか 子ども学科講師・音楽教育学